

# 漁師さんを悩ます「ソブ」の増加

琵琶湖博物館 主査 孝橋賢一

湖国の湖岸の景観をかたちづくるエリ



琵琶湖博物館から見えるエリ

皆さんは琵琶湖の沖合に矢印型に突き出た琵琶湖独特の漁法「エリ」をご存じでしょうか。エリは、魚の回遊がワタリと呼ばれる垣網に遮断されたときの習性をつま利用し、ツボと呼ばれる魚捕り部に誘導して漁獲する小型定置網の一種です。大小さまざまなものを合計すると琵琶湖岸におよそ200近くあり、漁期もアユの産卵シーズンである8月下旬から11月20日までを除く、ほぼ周年操業され、今では、琵琶湖岸の景観をかたちづくる重要な構成要素のひとつとなっています。

近年の「ソブ」の増加によるエリ漁への支障



南湖のエリ網汚損の現況(H13.5) 北湖のエリ網汚損の現況(H13.5)

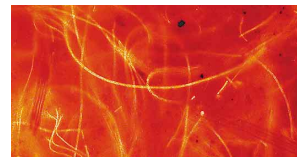
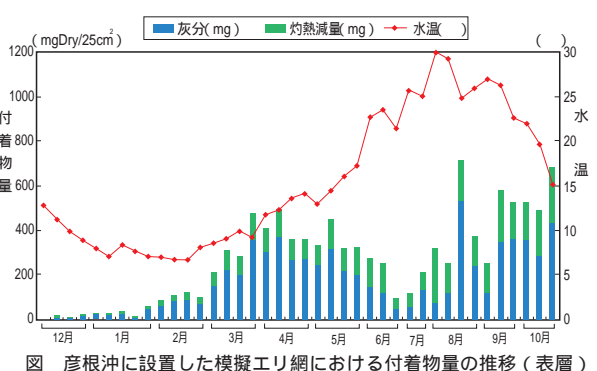
現在の琵琶湖漁業において、エリは漁獲量・漁獲金額ともに最も重要な位置を占めています。しかし近年、このエリ網に漁師さんたちが「ソブ」と呼んでいる茶色でモロモロとした泥のような附着物が多量につくようになり、しかも昔と違って落ちにくいとの苦情があちこちで聞かれるよう

になりました。このためエリ網の洗浄頻度が増加したり、漁獲量が減ったりするなど操業そのものにも支障がでてきました。

## エリ網附着物の正体

そこで現況を把握するため、平成13年5月にエリ網の汚れに関する現地調査を行ったところ、南湖のエリでは、網の汚れは昔から見られるアオミドロやサヤミドロなどがわずかに確認される程度でしたが、北湖では全域のエリ網に多量の附着物が付いているのが確認され、しかも水中で揺すってもほとんど落ちず、強烈なカビ臭を伴っていました。

また汚れのひどい北湖のエリ網の汚損状況を年間を通じて把握するため、一般的なエリ操業状況に準じ、12月初旬に幅3.5m×10mの模擬エリ網を彦根市須越町沖水深9mに設置して、定期的にその附着物の消長について調査したところ、図のように2月下旬頃より増加し始め、4月上旬頃(第1ピーク)と8月中旬頃(第2ピーク)に2つのピークがみられました。このことと一般的に7月上旬にはエリ漁を終えてしまうことから考えると、特にエリ漁に支障を来している現象は、第1ピークによるものだと考え



落射蛍光顕微鏡でみた北湖のエリ網附着物

られました。そこで採取したそれぞれのピークのエリ網附着物を顕微鏡で観察したところ、第1ピークは、ベタベタした泥が網一面に附着しているように見えました。落射蛍光顕微鏡という特殊な顕微鏡で観察すると主に光合成色素が橙色、赤色に励起され、この附着物の固まりは、小ささまざまな糸状性藍藻類の固まり、とくに糸状性藍藻であるフォルミディウム類のマットで形成されていることが判りました。フォルミディウム類は藻体が粘性のある鞘に包まれて

いることが知られ、この粘性のある鞘に土壌粒子や死んだプランクトンなどがトラップされ、網にからみつき、とれにくくなっているものと推察されました。また附着物が持つカビ臭もフォルミディウムのある種には、カビ臭を分泌する種類が知られていることから、このフォルミディウム由来でないかと思われましたが、現在までエリ網の附着物からカビ臭の強い株は得られていません。この点に関しては滋賀県水産試験場で研究が進められています。これに対し第2ピークはフォルミディウムがやや衰退し、アオミドロなど緑藻やヒドロなどの腔腸動物の増加によるものでした。

## 今後の課題

今回の結果からエリ網の附着物量は、一般に富栄養化が進んでいると考えられている南湖で少なく、貧栄養であると考えられている北湖で顕著であるという意外な結果でした。今後はエリ網附着物の問題がなぜ南湖で見られず、北湖特有の問題であるのか、なぜここ7、8年前に起こってきたのかといったことを検討し、これを切り口にしてとくに激変してきている琵琶湖湖岸域において見られる環境異変にせまっていきたいと考えています。